



「明治」という国家

司馬遼太郎著 日本放送出版協会 1989

経済学部教授 作間 逸雄

NHK のドキュメント番組（『太郎の国の物語』）と関連して出版された本書は、日本でナショナリズムが一定の拡がりをもって成立した時期、すなわち明治時代を取り上げている。

著者、司馬遼太郎(1923-1996)は、その明治という時代の気分を様々な作品の中で伝えてきた。代表的なのは何と言っても、正岡子規、秋山好古・真之兄弟を主人公とした、『坂の上の雲』(1968-1972)であろう。しかし、本書の主人公は、いわば「国民」である。

『想像の共同体』が明確に示したように、ナショナリズムは近代の産物である。封建的身分社会が崩壊したあとに、それは登場した。日本の場合、ナショナリズムの成立時期を明治20年代に求めるのが一般的である。個人の独立あってこそそのナショナリズムであり、本書に再三登場する福沢諭吉の表現によれば、「一身独立して一国独立する」(『学問のすすめ』三編)。著者は、「国民」をあらためて次のように定義している (p.216)。「国民」は「たれもが平等であると思っているし、げんに法のもと平等かつ等質である」。さらには、「どの国民も自分と国家を同一

視している」。やはり、福沢諭吉の表現を使えば、「その国を自分の身の上に引き受ける」(『学問のすすめ』三編)。そのような「国民」が創出されたのである。

「国民」が主人公といっても、それは、架空の存在に過ぎない。本書に登場するのは、もちろん、生身の人間である。読者は、多くの魅力的な、あるいはそうでない人物像に遭遇するはずである。日本における「国民」の創出に大きく関わった前出の福沢諭吉のほか、「国民」の先駆的事例となった幕臣、小栗忠順(ただまさ)や勝海舟等々である。長州藩や土佐藩が「国民」の創出につながる、どのような特質をもっていたかということについて著者が与える説明も興味深い。

最後に注釈をひとつ挿入する。ここでは、その一般的用語法によったが、実は、司馬はナショナリズムという用語を、排外主義を含む否定的な意味で用いる。司馬にとって忌むべき歴史としての日露戦争後から昭和20年までのこの国のあり方を、明治期のそれと区別する必要があったのであろう。この点は、同じ著者の「雑貨屋の帝国主義」(『この国の私たち』所収)を参照すべきである。